技術者からの視点

●第33回●

カタカナ語の国際性

藍野大学非常勤講師　木下　親郎

外国人にも理解できる優しい表記法

江戸末期から明治にかけての文明開化の先駆者たちは、新しい言葉を創り、古い言葉に新しい意味を与えた。オランダ留学経験のある西周が創った「哲学」はその傑作の一つと言える。「科学」、「技術」、「物理」などの言葉は既に存在していたが、現在の意味で使われるようになったのは明治時代からである。「化学」はオランダ語（Chemie）の音を模した「舎密（セイミ）」が創られたが古くからの「化学」になった。これらの明治の先達が作り上げた言葉を、我々の世代は当然のように使っている。その一方、外国語の音を模した「倫敦（ロンドン）」、「巴里（パリ）」などはカタカナ語に置き換えられた。

最近の科学技術用語は原語の音をカタカナで表すものが多い。根岸、鈴木両博士のノーベル化学賞受賞で有名になった「クロスカップリング」もそうだ。カタカナの読み方を知っている外国人なら、Cross-couplingであることを理解できる。このように、外国語の音をそのまま表したカタカナ語は、外国人にも優しい国際性を持っている。さらに、「クロス」と「カップリング」は広辞苑に「交叉すること」、「2つのものを1つに組み合わせること」と載っているので、科学者でない日本人にも優しい言葉だ。

原語の意味を知って和製英語を使う必要がある

最近、外国語のカタカナ表記の一部を省略した、特定の仲間の間でしか通用しないと思われる隠語が、マスメディアで氾濫している。先日、電車の扉に貼られた広告に「メアド」とあるのを見た。電子メールの「メールアドレス」のことだが、一般の人や、海外からの訪問客は説明がないので、理解できないと思う。公共の場にあるカタカナ隠語を使った広告は、品位だけでなく国際性も欠いたものになる。「パソコン」や「テレビ」のように、日本語として認知され、辞書に掲載されるまでは使わないでほしい。

オックスフォード大学出版局の辞典に「ジャパニーズ・ピジン・イングリッシュ」という項があり、代表例として「イチバン」を挙げている。「ピジン」は広辞苑には「ビジネスの中国語訛り。異言語の話者が接触・交流して生まれる混成語」とある。また、「ホームステイ」、「サラリーマン」、「ワープロ」、「ドクター・ストップ」、「バージン・ロード」を和製英語と言い、「日本で使われる英語は、外国人と話すことよりも、日本人同士で話すため」と書いている。言葉は進化成長するものだから自然にまかせよという人がいるが、ピジンや和製英語を公式の文書に使うなら、そのことを認識した上で使ってほしい。明治

時代に中学校で外国人と野球の試合をした経験のある人に守備位置を尋ねると、「ショートストップだった」と返ってきた。明治の中学生は正確な英語を使っていたのだ。

フランス語の統一のため、ルイ13世が作った、アカデミー・フランセーズは、現在でもフランス語の標準となる辞書を作っている。英国では一般紙と呼ばれる新聞と、夕刊紙と呼ばれる新聞では格調の異なる言葉が使われている。日本の一般紙、放送局、あるいは国際化を志向する企業や個人は、日本語を学ぶ外国人に優しい日本語資料を作るよう心がけてほしい。ちなみに、日本語を学ぶ外国人学生が困るのは、辞書に収録されていないカタカナ語だという。

カタカナ技術用語は正確に定義されているので誤解されることは少ないが、一般的に使われる外国語、特に修飾語は、日本人が知らない多くの意味を持っている。カタカナ語を使うときには原語の意味、さらにその言葉が名詞、形容詞、形容動詞なのかまで詳しく知っておく必要がある。それでも、誤った使い方となり、外国人に奇異な感じを与えることが多い。カタカナ語を使うよりも、辞書にある正確な日本語で表現した方が、日本人にも、外国人にも優しい国際的な日本語文になる。我々が外国語の文章を読むときに、辞書に頼るのと同様に、彼らも日本語文を読むときには辞書を頼りにしている。日本語文に使われた「改善」、「感性」や「もったいない」はkaizenやkanseiそしてmottainaiとして国際語になっている。

カタカナ語は話す時にも大きな問題がある。第一は、日本語にない「r（アール）」と「l（エル）」の区別である。我々が話すと「テレビ」は「tereb i」、「ラジオ」は「raｊio」、「カード」は「kado」、「ホテル」は「hoteru」と聞こえるそうだ。私が、米国でタクシー運転手に行く先を伝えるのに苦労したのは、エルとアールが入り混じった「ベル・テレフォン・ラボラトリー」であった。アクセントも問題だ。例えば、テレビで話されることの多い「マニフェスト」で、「マ」にアクセントを置くと、「船荷目録、（船・飛行機の）乗客名簿」を意味する英語になる。「フェ」にアクセントを置くと、イタリア語の「manifesto（宣言書）」を、そのまま借用した英語になる。アクセントの場所によって、英語では異なる意味になる。外国人にカタカナ語を話すときは、原語の綴りとアクセントの位置を確認しなければならない。

度胸英語は意思疎通の有力な手段である

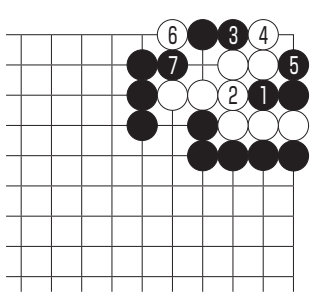
話す時に最も大切なことは、相手が正しく理解していることの確認である。岩波文庫の『戊辰物語』（東京日日新聞編）に、条約改正で伊藤博文が英国公使と英語で折衝したときの話がある。伊藤がユーロピアン・パウエルと怒鳴り、公使がけげんな顔をして「もう一度」を繰り返し、ようやくEuropean powers（欧州列強）であることがわかったときに、伊藤が「そうだ、そのパワーだ、パウエルなどとついオランダ語が出たのでね」と言い、伊藤の英語を度胸英語と紹介している。意思の疎通には、繰り返して確認を求めることのできる度胸英語の方が、流暢な英語よりも有力な手段なのだ。

P41の解答

■詰め碁

「正解」

まず黒1とアタリを決めるのが手順で、白2のツギのあと黒3から5で中手攻め黒7でしとめます。



■詰め将棋

1四飛　同香　2五竜　1三玉　1四竜　同玉　1五香　同玉　2五金まで、九手詰。

「解説」

初手1四飛を1四同玉は、1五竜、同玉、2五金まで。したがって1四同香は最善の応接。1四竜に、2二玉は1二金まで。飛車よりも金を残す手法であります。